



### キャンパスマップ

#### 【最寄駅からのアクセス】

■ 京王線、東急世田谷線

「下高井戸」駅から徒歩8分

■ 京王線 「桜上水」駅から徒歩8分

※例会当日は、正門からしか出入りできません。



## 平成二十八年度 仏教文学会四月例会

### 《特集》『東草集』から見る僧侶の学問と文芸 研究報告要旨

『東草集』全六巻は、紀州根来寺大伝法院の学頭（教学の統轄者）頼豪（一二八二～一三六〇以後）が、自身作の願文・諷誦文・表白などを集成した模範文例集である。十四世紀における根来寺の知識体系がうかがえるものとして、仏教学のみならず、歴史学、文学研究の分野にとっても貴重な史料である。文学研究の分野からは、延慶本『平家物語』との関わりについて指摘されている（牧野淳司氏による『『東草集』訳註研究』書評、『説話文学研究』第五十号、平成二十七年十月、所収）。根来寺という場に注目すれば、昨今、平成二十五年度説話文学会十二月例会で「（根来寺）の輪郭―空間・資料・人―」（於・和歌山大学）というテーマが掲げられるなど、注目されているところでもある。

『東草集』の本文は、『続真言宗全書』第三十一巻に収められているが、本文の精査はなされてこなかった。そこで、平成十三年に発足した「川崎大師教学研究所東草集研究会」では、月一回の研究会を開催し、『東草集』の書き下しおよび諸本の校合と注釈を行った。一昨年刊行した川崎大師教学研究所叢書第二巻『『東草集』訳註研究』（大本山川崎大師平間寺、平成二十六年三月二十一日）は、百回を超える研究会の成果である。

今回の特集では、「東草集研究会」の成果を踏まえながら、会のメンバー三人により、『東草集』の引用典籍から見た僧侶の基礎知識、願文や諷誦文などに見る追善儀礼の様相、根来寺僧の文芸活動などをめぐって報告する。十六世紀の終りに灰燼に帰し、現在うかがい知ることのできない根来寺の学問と文芸の具体的な姿を、多角的視点から明らかにしたい。

なお、広く研究に資するため、『『東草集』訳註研究』のデータの公開も検討しており、そのことについても言及したい。

\*

\*

\*

### 『東草集』の梗概

山本匠一郎

「東草集研究会」は、頼瑠僧正の七百年（遠忌（二〇〇三）にあたって、一般の僧侶に有益で、かつすでに活字化されている本を読んで手軽に出版しようという動機のもと、二〇〇一年に始まった。『東草集』は頼瑠の弟子の頼豪が書いており、『続真言宗全書』第三十一、表白祭文部に所収されているから、葬儀や法要にも役立つ、一挙兩得という目論みであった。しかし、これがあまりに難解すぎて、現代的な教化にはまったく役立たないものであることが読んでみてすぐにわかった。さらに、手軽どころか、写本にまで手を出すこ

となり、その後、十年以上にわたり苦勞を負う羽目になった。

文献屋は、蒐集家の素質がなければ務まらない。すでに全書に所収され、甲田宥畔師の校訂本が出ているのにもかかわらず、諸種の写本を揃える作業から始まった。文献蒐集には伝手も、お金も、手続きも必要である。コレクターの趣味はそれを集めている人にしか価値が分らないので、研究所や宗派当局からはずいぶん胡散臭がられた。私の専門は梵・蔵語仏典の研究で、中世日本など完全に門外漢であるのに、多年にわたり嫌々ながら続けてきたのは、ひとえにこの素質のおかげである。この度、仏教文学会の高橋秀城氏の要請により、束草集研究会の幹事として話をするにあたり、そういう愚癡なら話せる旨を伝えたところ、領掌されたので、研究会運営にあたって困ったことを中心に、『束草集』のあらましについてお話ししたい。

### 『束草集』に見る根来寺の追善儀礼

小林 崇仁

本書には願文・諷誦文・表白文など、計一二三篇の文章が収録されるが、そのうち先師や故人に対する追善儀礼に関わる文章として、願文九篇・諷誦文十三篇・卒塔婆銘八篇・表白文十三篇・知識文一篇・縁起文一篇・祭文一篇の計四六篇が見え、およそ全体の三分の一を占めている。

これらは実際の法会などで使用されたものが大半であり、執行の年月日、施主や願主、追善供養の対象、その方法など、具体的な記述がなされている。よってこれらは当時の根来寺における追善儀礼の実態を伝える史料としても貴重であろう。

そこで今回は、これら追善に関わる文章を整理し、頼豪周辺における根来寺の追善儀礼の様相とその特徴を考察したい。

### 僧侶の文芸―『束草集』を中心に―

高橋 秀城

報告者はこれまで新義真言宗の教学の礎を固めた頼瑜僧正（一二二六―一三〇四）や智積院第七世運敞（一一六一―一六九三）など真言僧侶の文学活動、幼童期の僧侶の学問習得法を記した東寺宝菩提院六世俊雄（一二四五―一五一六）の『連々令稽古双紙以下之事』などについて考察してきた。今回の報告もその一環として頼瑜の弟子にあたる頼豪の文学的側面に注目する。

彼の編著になる『束草集』は、文飾を凝らした流麗な文章の宝庫であり、そこには頼豪の深い文学的素養を見ることができ、また、和歌会に関する記述もあつて注目される。

本報告では、頼豪の知識の基を法脈や根来寺という場といった、彼の置かれた環境から探ってみたい。